

肝だめし 確認テスト

番 氏名

花山院の御時に、五月下つ闇に、五月雨も過ぎて、いと おどろおどろしくかきたれ、雨の降る夜、帝、さうざうしとや思しめしけむ、殿上に出で (a) させ (b) おはしまして 遊びおはしましけるに、人々、物語申しなどしたまうて、昔恐ろしかりけることどもなどに申しなりたまへるに、「今宵こそ、いと むつかしげなる夜なめれ。かく 人がちなる だに、気色おほゆ。まして、もの離れたる所など、いかならむ。さあらむ所に、一人往なむや」と (c) 仰せ (d) られけるに、「え (e) まからし」とのみ (f) 申し (g) たまひけるを、入道殿は、「いづくなりとも、(h) まかりなむ」と (i) 申し (j) たまひければ、さるところおはします帝にて、「いと興あることなり。さらば行け。道隆は豊楽院、道兼は仁寿殿の塗籠、道長は大極殿へ行け」と仰せられければ、よその君達は、「便なきことをも (k) 羨してけるかな」と思ふ。

一 空欄 () に適切な訳を入れよ。

花山天皇の () に五月の下旬の夜の間に、梅雨も過ぎて、たいへん () 激しく雨が降っている夜に、帝は () とお思いになったからであろうか、殿上の間にお出になつて () をなさつたときに、人々が物語を申し上げなさつて、昔恐ろしかったことなどを申し上げなさつたときに、帝が「今夜はたいへん () 夜であるようだ。このように () 所 () 気味悪く思われる。まして、離れたところなどはどうだろう。そうであるような所へ、一人で行けるだろうか」とおっしゃると、人々は「参ることはできないでしょう」とだけ申し上げなさつたのを、道長は「どこへでも参りましょう」と申し上げなさつたので、そのようなことを面白がられるご性格がございませう帝で、「たいへん面白いことである。それならば行け。道隆は豊楽院、道兼は仁寿殿の塗籠、道長は大極殿へ行け。」とおっしゃつたので、他の貴族の息子は「 () ことを申し上げたものだなあ」と思う。

二 (a) ~ (k) の敬語の種類と主体と対象を答えよ。

a		b	
c		d	
e		f	
g		h	
i		j	
k			

また、承ら(a)せたまへる殿ばらは、御気色変はりて、益なしと(b)思したるに、入道殿は、つゆさる御気色もなくて、「私の従者をば具しさぶらはじ。この陣の吉上まれ、滝口まれ、一人を、『昭慶門まで送れ。』と仰せ言(c)賜べ。それより内には一人入り(d)はべらむ。」と(e)申し(f)たまへば、「証なきこと。」と仰せ(g)らるるに、「げに。」とて、御手箱に置かせたまへる小刀(h)申し立て立ちたまひぬ。いま二所も、苦む苦む各々(i)おはさうじぬ。「子四つ。」と(j)奏して、かく仰せられ議するほどに、丑にもなりけむ。「道隆は、右衛門の陣より出でよ。道長は、承明門より出でよ。」と、それをさへ分かつたせたまへば、しか(k)おはしましあへるに、中の関白殿、陣まで、念じておはしましたるに、宴の松原のほどに、そのものともなき声どもの聞こゆるに、術なくておはしましたる栗田殿は、露台の外まで、わななくわななくおはしたるに、仁寿殿の東面の砌のほどに、軒と等しき人のあるやうに見えたまひければ、ものもおぼえで、「身の(m)候はばこそ、仰せ言も(n)承らめ。」とて、各々立ち帰り(n)参りたまへれば、御扇を叩きて笑はせたまふに、

一 空欄 〆 に適切な訳を入れよ。

またお受けなされた殿たちは、お顔色が変わつて()とお思いになつたが、道長は()そのような様子もなく、「私の家来を()行きませぬ。この陣の下役人であれ滝口の武士であれ、一人に『昭慶門まで送れ。』と()をなさつてください。それから中は一人で入りましょう。」と道長が帝に申し上げなされると、帝は「証拠がない」とおつしやるので、道長は「 」と言つて、帝が御手箱にお置きになつてゐる小刀をお受けしてお立ちになつた。もう二人も、嫌な顔をしてそれぞれお出かけになつた。「 です。」と申し上げて、帝がこのやうにおつしやつて評議しているうちに、一時にもなつたのであろう。帝は「道隆は右衛門の陣から出る。道長は承明門から出る。」とそれ()お分けになつたので、そのやうにお出かけになつたが、道隆は陣まで()お行きになつたが、宴の松原のあたりで何とも得たいの知れない声などが聞こえるので、()お帰りになつた。道兼は露台の外まで()お行きになつたが、仁寿殿の東側の石畳のあたりで、軒と同じ高さの人があるやうに御覧になつたので、無我夢中で、「命がございましてこそ、帝の御命令もお受けできるのでしよう。」とそれぞれ帰つて参上なされたので、帝は扇を叩いてお笑いになる

二 (a) ~ (o) の敬語の種類と主体と対象を答えよ。

a		b	
c		d	
e		f	
g		h	
i		j	
k		l	
m		n	
o			

肝だめし 確認テスト3

番 氏名

入道殿はいと久しく見えさせたまはぬを、いかがと思しめすほどにぞ、いとさりげなく、ことにもあらずげにて(a)参ら(b)せ(c)たまへる。「いかに、いかに。」と問はせたまへば、いとのとやかに、御刀に、削られたる物を取り具して(d)奉らせたまふに、「こは何ぞ。」と仰せ(e)らるれば、「ただにて帰り(f)参りてはべらむは証候ふましきにより、高御座の南面の柱のもとを削りて(g)さぶらふなり。」と、つれなく申し(h)たまふに、いとあさましく(i)思しめさる。異殿たちの御気色は、いかにもなほ直らで、この殿のかくて参りたまへるを、帝よりはじめ、感じののしられ(j)たまへど、うらやましきにや、また、いかなるにか、ものも言はでぞ候ひ(k)たまひける。なほ疑はしく(l)思しめされければ、つとめで、「蔵人して、削り屑をつがはしてみよ。」と仰せ言ありければ、持て行きて押しつけて見(m)たつひけるに、つゆ違はざりけり。その削り跡は、いとけざやかにて(n)侍めり。末の世にも、見る人はなほあさましきことにぞ申ししかし。

一 空欄 〓 に適切な訳を入れよ。

道長はたいへん長くお見えにならなかつたのを、(帝は)どうしたのかとお思いになる間に、(道長は)たいへん何気なく、荒々しい様子もなく参上なさつた。(帝は)「どうしたのか」とお尋ねになつたので、たいへん落ち着いて、小刀に、削られた物を取つて添えて差し上げなされると、「これは何か」とおつしやるので、「ただ帰り申し上げますのは証候がありませんので、高御座の南側の柱の根元を削りました」と、() 申し上げなされると、たいへん() お思いになる。他の殿たちの御顔色は、どうしても直らないで、この殿がこのように参上なさつたのを、帝をはじめ、感心し() なさるけれど、(道隆と道兼は)うらやましいのであろうか、また、どうしたのであろうか、ものも言わないでお仕えなさつた。(帝は)さらに疑わしくお思いになるので、()、「蔵人に、削り屑を() みる」とご命令があつたので、持つて行って押しつけ御覧になると、() 違わなかつた。その削り跡は、たいへん() ございました。後の世でも、見る人はやはり驚きあきれたことだと申し上げた。

二 (a) ~ (n) の敬語の種類と主体と対象を答えよ。

a		b	
c		d	
e		f	
g		h	
i		j	
k		l	
m		n	